日本国際経済学会第 69 回全国大会 (大阪大学 2010 年 10 月 16 日・17 日)

「小島理論 VS レディング学派－80 年代論争の回顧と今日的意義」

伊田昌弘（阪南大学）

要　旨

1970 年代から 80 年代中盤にかけて徐々に形成されてきた、いわゆる「小島理論」は、多国籍企業や直接投資の研究分野において、大きな影響を与えてきた。国際貿易と直接投資を同じ比較生産費説によって統合し、マクロ経済理論として、投資国・受入国双方への経済厚生の効果分析をも可能にしようと試みる「小島理論」は、我が国の生んだ金字塔ともいえる偉大な業績であり、主として正統な国際経済学のひとつの分野として、多大な貢献をしてきたといえる。

ところで、ほぼ同時期に英国のレディング大学のダニングを中心として勃興してきた、いわゆる「レディング学派」は、ミクロの企業に着目することで、「市場取引」を通さない「企業内部取引」といった現象に立ち入り、いわゆる「内部化理論」をコアとして形成され、主としてリアルさを追求する国際経営学の分野で大きな影響を与え、多国籍企業の行動原理を説明する支配的な学説として国際的にみなされてきた。

この２つの相異なった学問潮流は、1980 年代レディング学派のバックレーやラグマンが「小島理論」を国際的に紹介したことを機に互いに交差することになる。小島清は、国際分業の視点から「内部化理論」を多国籍企業による市場内部化による独占・寡占の理論とみなして批判を加えたことから、双方の論争へと発展した。小島清が「国際ビジネス・アプローチ」と呼んだこの学派は、「取引コスト」といった企業が直面する現実から、「企業の競争優位」を想定し、「小島理論」の「比較優位」では扱えないリアリティを主張し、両者の論争が続くことになったのである。この論争を通して、小島はレディング学派の主張をも積極的に取り入れて自らの理論を精緻化しようと試み、小島理論の幅が広がって、一応の完成をみることになった。

本報告では、こうした 80 年代の論争について、回顧することを通して、その論点を明らかにし、その後の学問発展や今日的意義を広く考察する。昨年（2009 年）1 月、レディング学派の大御所と多くの人々によって目されてきたダニング教授がレディンングの地で逝去したのに続き、本年（2010 年）1 月、本学会において多大な貢献をされてきた小島先生がご逝去された。今日的な視点からこ

の 2 人の偉大な学者を偲び、その足跡を辿ることで、「国際経済学」と「国際経営学」の橋渡しが少しでも可能であることを企図して、本報告を、今年度日本国際経済学会における「小島清先生特別セッション」に参加するものである。

追尾ではあるが、昨年（2009）、期をほぼ同じくして、我が国における内部化理論の草分けのお一人であり、国際ビジネス・アプローチに属しながらも、国際経済学の小島理論を何とか国際経営に接合しようと長年努力されてきた中島潤先生がご逝去された。併せて中島先生の学恩に報いられればと願っている。